

ユニテ

2011. 4

38

財団法人
ロマン・ロラン
研究所



表紙：ロマン・ロラン夫妻の墓。

フランス中部ブルゴーニュ地方のクラムシーに近いブレーブにある。（尾埜善司撮影. 2008）

目次

小林多喜二とロマン・ロラン

——反戦・国際主義の文学を求めて——

エヴリン・オドリ …… 1

『最後の扉の敷居で』から ……

村上光彦 …… 10

追悼

尾埜さんとロランと ……

今江祥智 …… 19

佐々木昌義理事とともに ……

小尾俊人 …… 23

ユニテ・フォーラム

ロマン・ロランの『周航』を読んで	馬 淵 岳 大	31
ロマン・ロランを通して広がった世界	黒 柳 大 造	36
東日本大震災と『魅せられたる魂』——予告するもの——	宮 本 エ イ 子	39
ロマン・ロラン研究所の活動報告		41
財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書		50
二〇一〇年度 賛助会員、寄付者名簿		51
『ユニテ』編集を終えて	小 尾 俊 人	52

小林多喜二とロマン・ロラン

——反戦・国際主義の文学を求めて——

エヴリン・オドリ

一九三三年二月二〇日、小林多喜二は特高警察の手で虐殺された。彼の死を知ったフランスの思想家・作家ロマン・ロランが抗議と追悼の文章をフランス共産党機関誌『ユマニテ』に掲載した、と長い間信じられていた。だが、実際には、ロマン・ロラン自身が書いたそのような記事はない。しかし、ロランと共に活動していた人達がただちにフランスの新聞で小林多喜二の死を批難した事実が確かにあったと認められる^①。

ロマン・ロラン自身による追悼文のような、ロランと多喜二を直接的に結びつける証拠が残っていないにしても、二人の間の共通点や接点はなかったわけではない。まず、小林多喜二が死んだ当時、二人がそれぞれの国において反ファシスト・反戦の活動に参加していたことは紛れもない事実である。そして遡れば、日本におけるプロレタリア文学はフランスにおける反戦主義・国際主義文学に強く影響を受けている。さらに、ロランと多喜二の平和と文学に対する精神には共通するところが多い。

それらの共通点を中心に、『蟹工船』の翻訳者として、小林多喜二とロマン・ロランに関する感想を述べたい。

一、小林多喜二とロマン・ロラン ― 平和の使徒・国境なき作家

小林多喜二とロマン・ロランの、それぞれの思想と実践の背景には、二人が生きていた戦乱の時代がある。一方では普墮戦争、普仏戦争、パリ・コミューン、ドレフュス事件、第一次世界大戦、世界恐慌、第二次世界大戦、他方では大津事件、日清戦争、日露戦争、朝鮮合併、大逆事件、関東大震災の際の朝鮮人と社会主義者の虐殺、満州事変など一九世紀後半から二〇世紀前半に架けて、ヨーロッパでも日本でも戦争や事件が相次いだ。そして、いよいよ第二次世界大戦（十五年戦争）に至る。小林多喜二もロマン・ロランも、戦争を当たり前にする世の中と立ち向かい、反戦の思想と行動を貫いた。

第一次世界大戦の犠牲者は戦闘員の戦死者は九百万人、非戦闘員の死者は一千万人、負傷者は二千二百万人と推定されている。災厄の甚大さを目のあたりにしたヨーロッパでは、戦争を嫌う思想が広がった。その結果、一九二〇年に国際連盟が成立され、一九二八年に国際紛争を解決する手段としての戦争を放棄し、紛争は平和的手段により解決することを規定したパリ不戦条約 (Pacte Briand-Kellogg) が締結された。しかし、反戦主義がこのように主流になるより以前から、愛国心に満ちた大勢の若者たちがよるこんで戦いくさに向かった時（一九一四年頃）、すでにわずかの人数ではあったが戦争を批難する声もあった。一九一四年、熱狂的な愛国主義者の学生に暗殺されるジャン・ジョレスはその一人だった。そして、ロマン・ロランもその一人だった。

ロランは一貫して平和主義・国際主義のために生きたと言っても過言ではない。ここですべて書ききれないが、彼の行動をいくつか見てみよう。一九一四年に、フランスの青年が喜んで戦火に向かっていた時にも、反戦の傑作である『闘いを超えて』を発表した。同一一九一四年よりスイスのジュネーヴで国際赤十字による俘虜事務所に協力する。

一九一五年、その文学における理想や人間主義のため (as a tribute to the lofty idealism of his literary production and to the sympathy and love of truth with which he has described different types of human beings) ノーベル賞を受賞する。一九二七年に反ファシズム国際委員会の名誉議長となる。同年、『魅せられたる魂』を著す。一九三一年、ガンディーがロランを訪問する。一九三二年アムステルダムにおける反戦・反ファシズム大会名誉議長。一九三三年に反ファシスト国際委員会の名誉総裁となる。同年、ヒトラー政府からのゲーテ賞を拒否する。一九三四年に反ファシスト行動委員会の第一回宣言に署名する。一九三五年『闘争の一五年』、『革命によって平和を』を著す。一方、プロレタリア文学の代表作者として知られている小林多喜二は、ロマン・ロランとアンリ・バルビュスの思想を中心とした国際反戦会議の呼びかけに応じて、一九三二年から国際反戦会議と連携する組織を日本で設立するために熱心に活動していた。一九三二年十二月、吉祥寺の江口宅で行われた上海反戦会議支持運動への草案を決定する会合に小林多喜二は参加した。そして一九三三年二月二〇日に、警視庁特高らの拷問により午後七時四五分殺される。多喜二が残虐にあわなければ、反戦主義の活動を続けていたのであろう。

二、日本プロレタリア文学とフランス

廻れば、フランスにおける平和主義の思想が厳密に日本プロレタリア文学と結びついている。架け橋になったのは小牧近江という人物である。

仏文学者、翻訳家、社会科学者の小牧近江は一九一〇年に(当時一六才)渡仏し、苦学の末、一九一八年にパリ大学を卒業。第一次世界大戦時にフランスに滞在したからこそ小牧近江は、戦争の恐ろしさを知った。また、ロマン・ロランやアンリ・バルビュスの影響を受け、「クラルテ」(光)運動に参加する。一九一九年に帰国した後、金子洋文

らと文芸雑誌『種蒔く人』を創刊、反戦平和をめざす詩や評論を執筆した。プロレタリア文学運動の先駆的な役割を果たした。

『種蒔く人』は文学作品としての傑作を残さなかったが、後のすべてのプロレタリア文学系の文芸雑誌の母体となった。また、ロマン・ロランとアンリ・バルビュスの論争を全面的に翻訳して日本で紹介したのもこの『種蒔く人』である。一九二三年（関東大震災の後）、『種蒔く人』は廃刊された。ちなみに、『種蒔く人』のタイトルは、「クラルテ」運動の平和主義である真実（光）という種を、日本で蒔いて行くという小牧近江の使命感に由来する²⁾。

翌年の一九二四年、小林多喜二等が同人誌『クラルテ』誌を創刊したが、これもまた『種蒔く人』の灯を受け継ぐ志によるものだった。つまり、ロマン・ロランやバルビュスと小牧近江を通して、小林多喜二へと直線的に伝わったのである³⁾。

三、ロマン・ロランと小林多喜二における国際主義の文学

多喜二とロランの間には相違点も少なくなかった。まず、共産党に対する態度が異なる。党のために文学活動をし、党のため生き、党のために死んだ小林多喜二に対して、ロマン・ロランが共産党と自由につき合っていて、各党や各流派を超越した立場にたった。また、ロランの思想の礎とも言えよう文明論は多喜二の作品にまったくない。多喜二の場合はなにより社会階級論・階級闘争論が中軸である。そして文芸の面でも、アバンギャルド的な文体を追求していた多喜二と違って、ロランはキュビズムや未来派などに対して不信感を抱いていた⁴⁾。このような対照的な点も両人の思想を理解するため、または両国の歴史的背景を知るために実に興味深く、今後追求すべきであるが、今回はこの話を省いて、共通するところのみ述べたい。

第一、ロマン・ロランも多喜二も、人類が一つである事を信じていた。この点については、ロランのどの作品のどの文を引用しても良いが、例えば、フレデリック・ファン・エーデンへの手紙の中に次の文章がある。「問題はヨーロッパの世論をつくりなおすことです。それがもっと急務です。ドイツ人、オーストリア人、フランス人、ロシア人、イギリス人等々……でしかありえない幾百万人のなかにあつて、かりそめの国というものの利己的利益を超えて、全人類の文明（中略）の利益を見失うことのない人間になるように努めましょう。」

また、『ジャン・クリストフ』の中に次のエピソードがある。（主人公ジャン・クリストフ（＝クリストフ）が尊敬しているオペラの作者たるフランソア・マリー・ハスレルは、ジャン・クリストフの住んでいる町にやつて来て、自作の音楽会を指揮することになった。音楽会の後、ハスレルを囲んだ宴会が催されている。）ハスレルは杯を手にして、何か口をきいていたが、その顔がにわかひきつった、そして言った。

「今日のような愉快な日の喜びにも、われわれは敵を忘れてはいけません。人は決しておのれの敵を忘れてはいけません。われわれが蹂躪じゅうりふされなかつたとしても、それは敵のせいではなかつたのです。敵が蹂躪じゅうりふされないとしても、それはわれわれのせいではないでしょう。それゆえに今私は、乾杯の辞として、われわれが……その健康を祝したくない人々も世にはあるということを申したいのです。」

人々は皆、その独特な乾杯の辞を喝采かつさいし興きようがった。ハスレルも皆といっしょに笑い出して、上機嫌きげんな様子に返つた。しかしクリストフは当惑していた。自分の偉人の行動を論議することをみずから肯がえんじなかつたとはいへ、その晩、晴れやかな顔付と輝かしい考えしか存すべからざる時に、氏がそういう厭いとなことに思いを走せたのは、彼の気に入らなかつた。けれども彼の印象は雑然たるものであつた。極度の喜びと、祖父の杯で飲んだわずかなシャンパンのために、その印象はすぐに追ひ払われてしまつた。⁽⁶⁾

あるいはまた、『戦いを超えて』の中に次の文章がある。「人類は偉大な集会的な魂たちの交響曲である。その要素の一部を破壊せずには、それを理解し愛することができないものは、野蛮人であることを（中略）示すのである。」

小林多喜二の名作『蟹工船』においては、国境を越えた、人間同士の理解が可能である事は明確に説かれている。例えば、嵐にあった日本人の漁師がロシア人に救われた逸話がある。恐ろしい敵と言われていたそのロシア人に出逢って、漁師達は次のように感じる。

親切な人達ばかりで、色々と進んで世話をしてくれた。然し、初め皆はやっぱり、分からない言葉を云ったり、髪の毛や眼の色の異なる外国人であるということが無気味だった。

何アんだ、俺達と同じ人間ではないか、ということが、然し直ぐ分からなかった。

また、多喜二にとって、共産党の活動の根本に国際主義がある。

支那プロレタリアの英雄的な奮起は、膚を隣り合わせている日本のプロレタリアをどの位力付け、はげましているか分からない。私は今『蟹工船』が、同志潘念之の尊敬すべき努力によって、その英雄的な支那プロレタリアの中に読まれるであろうことを考え、異常な興奮を感じている。この作で取り扱われている事実は、日本のそれのように支那のプロレタリアには或いは縁遠いかも知れない。然し！ 仮に、『蟹工船』の残虐を極めている原始的搾取、囚人的労働が、各国帝国主義の鉄の鎖にしばられて、動物線以下の虐使を強いられている支那プロレタリアの現状と、そのまま置きかえられることができないだろうか。できるのだ！ とすれば、この貧しい

一作は、貧しいと雖も一つの「力」となり得る。私は何よりもこのことを信じている。

では、道を同じくする支那の仲間達よ、私は、君達が、常に健康で、朗らかであることを望んでいるのだ。^①

ロランの作品の場合も多喜二の作品の場合も読者は、自然と自分がある国家の一部ではなく全人類の一人である事を肌で感じる事ができる。

次に、多喜二もロランも、反戦という闘いにあたっては、文学こそが武器であると信じていた。平和のために書くことが文学の必然であると二人は感じていたのである。人類のために書く、という使命感と必然性に導かれ、弾圧をも恐れることなく執筆に励んでいた。だから二人の作品は伏せ字や発売禁止の対象になったり、ロランがドイツ人の友、国家の敵と厳しく批難され、多喜二が虐殺された。

『蟹工船』は、軍・天皇・資本家の関連性（とその危険性）を批難しながら、植民地における搾取や帝国主義戦争の本質を見せる作品である。

例えば、次の台詞がある。

「俺達には、俺達しか、味方が無えんだな。初めて分かった。」

「帝国軍艦だなんて、大きな事を云ったって大金持の手先でねえか、国民の味方？ おかしいや、糞喰えだ！」

『蟹工船』に登場する漁夫や船員たちは、同化された結果、国家・天皇・軍を素直に敬愛し、敵であるソ連人を貶すようになる。然し、自分たちが資本家たちにモノであるかのように簡単に使用されると分かると、やがて愛国

という妄想を棄却する。

一方、ロランの『戦いを超えて』に次の文章がある。

これらの戦争を創出した犯人たる国家の首脳陣は、あえてその責任を負わないことを私は知っている。各自が責任を相手に負わせようと陰険に努めている。そして従順に従って行く国民は、人間よりも偉大な力が一切を導いたのだと称して諦めている。「戦争の宿命は一切の意志よりも強い」という古い極まり文句を、またぞろ耳にするのである。それは、自分たちの弱点を神に祀って崇める、群集の古い極まり文句である。人間は、自分が統治する義務のある世界の混乱の罪をさせるために、運命というものを発明したのである。決して宿命はない！宿命とは、私たちが欲することだ。それはまた、よりしばしば、私たちの意欲が足りないということだ。さしあたり、私たち各人が、悔悟メアクトルをなすべきだ！この知識人選良、これらの「教会」、これらの労働党は、戦争を欲しなかった……。よろしい！……

戦争を防止するために彼らは何をしたのか？ 彼らは火事をあおり立てている。各自がそこに薪を運んでいるのだ。⁽⁸⁾

終わりに

ロマン・ロランと小林多喜二は響き合う声である。

小林多喜二とフランスとの繋がりを追うことで、プロレタリア文学の根源が見えてくる。そして、『蟹工船』の意味を再確認することができる。なお、多喜二とロランの面影と共に、日本においてもフランスにおいても忘れつつあ

る戦前の歴史が蘇る。

「国際交流」や「グローバル化」が唱えられる今日、本当の国際主義を我々に教えてくれるのがロランと多喜二ではなからうか。

- (1) 高橋純、「多喜二とロマン・ロラン：伝説の〈事実〉と〈真実〉」、『小樽商科大学人文研究』一一八号、一九一～二二〇頁を参照。
- (2) ロマン・ロランとアンリ・バルビュスの、小牧近江への影響について、北条常久、『種蒔く人小牧近江の青春』、筑摩書房、一九九五年を参照。
- (3) 小笠原克『小林多喜二とその周辺』翰林書房、一九九八年、一〇〇頁～一一五頁
- (4) ロマン・ロラン、『Journal des années de guerre (日記)』Paris, Albin Michel、一九五二年、三四七～三四八頁を参照。
- (5) ロマン・ロラン、「フレデリック・ファン・エーデンへの手紙」〔『戦いを超えて』収載、七三頁。〕
- (6) 『ジャン・クリストフ』、豊島与志雄訳、岩波文庫、一九八六、第一卷「曙」。
- (7) 『蟹工船』支那訳の序文（一九二九年十二月七日）
- (8) 『戦いを超えて』、二二六頁。

ロマン・ロラン セミナー 於 関西日仏学館
（『蟹工船』仏語版訳者 東京大学研究員）

『最後の扉の敷居で』から 10

村上光彦

資料六十二——「ロマン・ロランからレーモン・ピシヤール神父あて」（一九四三年五月二十四日付）

ピシヤール神父がルイ・イヤサント・ブティヨ神父の著作『聖女ベルナデット、その内的・宗教的生涯』（新版、一九四〇年）ほか一冊をロランに送ってよこしたことへの礼状だ。ロランは、この本を読んだあとでは《純真・単純・私心のない》聖女ベルナデットを愛さないではいられない、と読後感を述べた。彼はさらにこう書いている。

「わたしは信仰のある人たちから、彼らが信仰に向かって辿っていきける秘訣を得ようと企ててきました。その秘訣は、要するにいつもこういうことに帰着するように思えました。

《信ずるがゆえに信ずる。このことは〈神〉から人間に——個人的に——課される自明の理である。——》

それ以外の理由は補足的であって、おまけにしていると言ってもよいのです。それらの理由だけをもってしては、断言するには不十分でありましょう。——なおまた、それだけでは否定するためにも不十分なはずです」。

ロランはこうも語る。——「いかなる形姿も、いかなることはも、わたしにとって〈福音書〉の〈主〉ほどに聖にして親しみぶかくはありません。また彼の直接の証人のなかでは〈聖ヨハネの福音〉にたいする以上の優しさを覚えることはありません。しかし、イエスの輝きわたる人間性と、人々がイエスにあるとしている神性とのあいだは、非常に遠く隔たっているのです。——非常に遠く？ おそらく、ごく近いのです。そのあいだには深い空間が開いているのでして、おそらくはそれはひと跳びで、《一閃》の電光のうちに跳びこすこともできるのです。それが、それは二つの思考世界を分け隔てているのです」。

ロランの愛読者なら、ロランが若いころから三度はその種の閃光に見舞われたことを知っている。それは『内面の旅路』のなかでも『ジャン・クリストフ』のなかでも語られていることだ。『最後の扉』のなかでも、ロランが一九四三年二月に重病に罹って死の瀬戸際まで近づいたさい、《もうひとつの岸边》に近づき、他界に越えて出る《稜線》を体験したことが語られている。

ロランはピシヤール神父にあてたこの手紙のなかでも、もうひとつの岸边へ飛翔することができるよう「わたしに翼が与えられるように祈ってください」と神父に頼んでいるのだ。

しかしロランは、この手紙のなかでも、『真理の探究』を誠実に続けようとする決意を表明する。《それというのも、真理の探究も〈神〉に由来する》ことだからだ。

「わたしの精神は（わたしは）真理を見なくてはなりません。そして、わたしの精神に真理がみえないのなら、つつましい誇りをもってこう言いたいのです——《わたしは弱すぎます。わたしには真理が見えません。しかしわたしは、けっしてたわむことなく真理に向かって歩み、そして真理に奉仕するでしょう。わたしは忠実なので

す』と」。

彼はそう書いてから《歩み》という言い方にいくぶんかの皮肉を覚えるともつけ加えている。それというのも、彼は冬の重病以来、脚が不自由になって、歩くのに不自由を覚える身となっていたからだ。

彼はさらにつけ加えて、近く医師に診察してもらうためにパリへ出かける予定だとも述べている。回復を図るためには夏じゅうヴェズレーにとどまっていたところだが、診察を受けないわけにはいかないというのだ。ロランはこの手紙の末尾でこうも語っている。

「わたしは仕事を再開しました。ペギーについての本のおわりがもう近いのです」。

彼の大作『ペギー』がこれだけの労苦のなかで完結に達したことに思いを馳せよう。

資料六十三——「レーモン・ピシャル神父からロマン・ロランあて」（一九四三年五月二十九日付）。

ピシャル神父は先にヴェズレーへ出かけたド・パイユレ神父からロマン・ロランについての消息に接していたのだが、ド・パイユレ神父がパリへ戻ってきて、パリで初めて同神父に出会ったのだという。それぞれ別々にロランに接していた神父どうしが、このときたがい知り合いになったわけだ。

ピシャル神父はロランにこう書き送っている。——「そうです、〈神〉はわたしたちの恩寵への忠実ぶりに

ついで判断なさってくださいるでしょう。わたしは先生の忠実さのことを——いささか義理をこめて——感嘆申し上げています。『魅せられた魂』を拝読いたしましたとき、打ち明けて申しますと、先生の人間主義にたいし、〈神〉への忠実という観念や罪という思想が欠如していることに、わたしはいくぶん危惧の念を抱いたのでした。先生はこう書いておいでです。——「ジュリヤンは……アネットの罪などということは思ってもおらず、悔い改めるべき義務についても思ってもいなかった。この二人にはともにキリスト教徒としての天性がしみこんでいた。もっとも自由なキリスト教徒でさえ、この天性からけっして解き放たれてはいない……彼らが純粹であったのは、目に見えない〈神〉なり、あるいは目につきすぎる〈神〉の代表者たちなり、彼らが掲げる〈律法の表〉なりへの従順さからではなかった……」このページは罪の感覚が近代にいたって消え去ったことを明瞭に示しています。そしてこの消滅は人間の進歩にとつての損失なのです。もとより、先生が罪についての混迷し、不健全で、ヤンセニウスの観念にたいして反撃なさるのは理にかなっています。しかし先生はこの観念を捉えられるのに、それがすでに退化の現われであるような段階において捉えられました。すべての靈的上昇の基礎には、目に見えない〈神〉の聖性と……わたしたちの貧しさとのあいだに存する強烈な不適合がございます。《〈主〉よ、わたしどもから遠ざかりたまえ。なんとすれば、わたしは罪びとでございますから》「【聖ルカ福音書、第八章】。この罪の感情は突如として聖パウロに襲いかかったものでありますが、現代人はもはやそれを抱いておりません。……〈神〉は目に見えず、〈御子〉は別として、だれひとり〈神〉を見たことはないのです。……キリストは目に見えない〈父〉の聖性を人間の振る舞いとして表すためにこられたのです。——「エツケ・ホモ。エツケ・デウス。エツケ・ルクス・ノストラ（ここに〈人〉あり。ここに〈神〉あり。ここに〈光〉あり）」。

さて、ピシャル神父はこの手紙のなかでルルドの奇蹟に言及している。ロランがそのくだりを読んでどのような

感想を抱いたのかは不明だ。だが、すくなくとも信仰と無縁な常識にとっては信じがたいルルドの奇蹟にたいし、どうやらこの神父はなんら疑いをさしはさまなかったらしい。神父は十年ほど以前に、ルルドで奇蹟に恵まれたガルガンという人物に会って話を聞いたというのだ。

ガルガンは鉄道事故のさいに脛骨が二ヶ所折れてつながらなくなった。彼は初聖体を受けたあとで宗教から離脱していたのだが、母親を喜ばせたいというだけの気持ちからルルドへ運んでいかれたのだった。奇蹟を願う人たちの行列が広場を通っていったときには、近くの人たちが彼の死んでゆくところを見ないですむよう、担架を担う人たちは彼に羅紗の掛け布を掛けておいた。ところが聖体顕示台が彼のそばに運ばれてきて聖餅の祝福に接するや、両脚が瞬時にして快癒し、彼は寢床から起き上がった。《聖体としてのキリスト》から発した功德が、パレステイナに立ち寄ったさいの《歴史上のキリスト》の現存を明らかにしたのだ。「暗示にかかったためなのでしょうか。——骨の組織が瞬時にして修復された事実を説明するのに、そう言っただけで十分なのでしょうか。」そのちこの人物は、生涯をその話をする事で過ごしたとのことだ。神父は「使徒行伝」からサウロの例を挙げてゐる。「サウロは元どおり見えるようになって……すぐ……『この人こそ神の子である』と、イエスのことを宣べ伝えた」。

ピシヤール神父はキリストの奇蹟を語るさいに「キリストは心ならずも奇蹟を行われるのです」という言い方をしている。神父自身の解説はこうだ。——「わたしたちにとって大切なことは、わたしたちに提示されるあらゆる種類の多種多様なしるしを集めることです。それらが輻輳しているという事実が、理性にたいしては断言する義務として迫ってくるのです」。彼はこうも語る——「理性と信仰とがわたしにとって〈神〉との関係を定めてくれます」。神父

は、キリストが彼自身の《光、使命》に忠実であるのみならず語ったので、彼を信ずるのだという。神父が言うには〈信仰〉そのものは〈神〉から人間に課される自明の理などではなくて、「わたしに代わって見た、あるいは見ている《他者》の証言にもとづいている」のだ。

この本を読むうえで留意したいのは、神父たちの側はロランをふたたび信者の牧場へ引き戻したいと熱心だし、これにたいしてロランとしても、神父たちの誠意と熱意とに感じ入って感謝の念を覚えているという事実だ。もとよりロラン自身も神父たちに誠実な態度を守りぬいた。ただ《教会》の外には救いがなし」と明言されても、ロランとしてはみずからの理性を曲げて神父たちの期待に添うわけにはいかなかった。それでもやはり、根底において立場を異とする相手に誠意をもってつきあいつづけた彼の態度には心を打たれる。

資料六十四——「ド・パイユレ神父からロマン・ロランあて」（一九四四年八月十五日付）。

この日は〈聖母被昇天祭〉の祝日だった。ド・パイユレ神父はこの機会をとらえて、ロランが彼に示してくれた友情への感謝をあらたにしている。

「昨年秋のある日、わたしがヴェズレーをあとにしたさいに、先生はこうおっしゃいました。《これでわたしたちはすっかり友だちどうしになったね》。そのことがわたしの心に深く刻まれたのです。それは荣誉あることだったし、《すてきに甘美》な気持ちにもさせてくれたからです」。

「わたしはじつにしばしば心の中で先生と論じています。お察しのことでしょうが、それは〈信仰〉の問題と

関わっているのでありまして、先生がその点にかけてはカトリックの通功「カトリック教会の用語。信者たちの個々の信仰をたがいに通いあわせること」からいまなお隔たっておられるからです。あるときは、こういうおことばをめぐってです。《もしわたしが、キリストのことをほんとうに〈神の御子〉だと信じていたならば、なにごとわたしを引き留めることはできないだろうよ》。あるときはこういうおことばをめぐってです。《それにしても自己満足から秘蹟を受けることはできない、それでは〈神〉の神聖をけがす行いになってしまうからね》。

また、ロランに見られる人格神ではない一種の〈存在〉に溶け込んでしまおうとしたり、《稜線》という知的なヴィジョンに解決を求めようとしたりする傾向も、神父としてはそのまま受け入れるわけにはいかない問題点となった。そこで神父はあらためてロランに忠告する。

「理づめの推論には、先生に〈神〉への信仰を与えることなどできません。それにしても、先生の理性は正統性のある要請をいくつも発してはいます。ただ、それは本質的なこととはいえないのです」。理づめに推論していても〈神〉の言うに言われぬ慈愛にはあずかれない、というのだ。《愛》と《愛の光》とはただ〈神〉のみに発するからには、ひたすら〈イエスの心〉こそ唯一無二の源泉だと心得よう、と神父は説く。《教会》外には救いがない》とはそのゆえだという。神父は《友情》の名において、あくまでもロランに迫ってやまない。

なおド・パイユレ神父は、ルイ・ジレがせっかくロランと旧交をあたためながら、死に急ぐようにして世を去ったことでロランにおくやみを述べたうえて、《希望を持たないほかの人々のように嘆き悲しまないために》という聖パウロのことばを引用している。また神父は「お祈りをなさるさいには、いくぶんなりとわたしのことを思ってくださいますよう。わたしは非信者の祈りを無視したりはいたしません」とも頼んでいる。また彼は、近日中にコンピエーニュへ行くはずなので、アロンド川のほとりに聖母のための礼拝堂がなかりとも、そのおりにとにかく同地で祈り

を捧げることをも約束している。彼がアロンド川などと言いだしたのは、ロランが大病中の幻覚にアロンド川のほとりの礼拝堂を見たという話を念頭に置いてのことなのだ。

資料六十五——「ロマン・ロランからミシェル・ド・パイユレ神父あて」(一九四三年八月二十九日付)

この手紙は、前項にかかげたド・パイユレ神父からの書簡への真情にあふれる礼で始まっている。

「聖母」の日のご親切なお手紙に、優しく、また深く心を打たれました。もしかしてわたしの心がキリストへの信仰の真実にたいして開け放たれる恵みが与えられるとしたら、ほかのなんびとにしても、あなたにもましてそのことに成功する機会を得られる見込みはないでしょう。それというのも、なんびともあなた以上にはきちんとわたしの心にその話をするすべを知らないからです。あなたは《人間らしい》方です。あなたはほかの私たちの魂が理解できます。彼らの考え方があなたの考え方と異なっているときにさえ、それらの魂はあなたにとつて兄弟のように親しみぶかいです。そしてそのことこそ、あなたのキリスト教徒としてのいくつもの力のうちでも本質的なのです。キリスト教徒には、そうした力の欠けている者が多すぎます。そしてそうだとしても、あなたの親しみぶかさこそは、キリストのまなざしが閉ざされた魂のなかへ入っていきけるための唯一の道なのです」。

ロランはつぎに、聖マルコの福音書を読むさいにつねづね心を打たれてきたという同書中の説話をあげている。ひとりの若者がイエスのもとへやってきて《救われるにはどういうことをすべきか》と訊ねた。イエスは若者の目を見つめ、いつくしみを覚えてことばをかけた。ところがイエスには前もって、その若者に犠牲を求めても、若者はそれ

に同意できないだろうということがわかってしまった、というくだりだ。「マルコによる福音書」にはこうある。

イエスは若者に告げた。「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬えという掟をあなたは知っているはずだ」。すると若者は、「そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。するとイエスは、彼を見つめ、いつくしんで決定的なことを告げた。「あなたに欠けていることが一つある。行っている物売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい」。その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産をもっていることが妨げになって、彼はすぐさまイエスにつき従ってゆくわけにいかなくなったからである。

イエスは、そのあとで弟子たちに告げた。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」。

弟子たちはますます驚いて「それでは、だれが救われるのだろうか」と、たがいに話しあった。するとイエスは彼らを見つめて告げたのだ。——「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ」。

第十四完（次号につづく）

（成蹊大学名誉教授・仏文学）

尾埜さんとロランと

今 江 祥 智



ロマン・ロランを読み読んで熱くなって、ロマン・ロラン研究会なるものを発足させたのは大学生のころのこと。その勢いで大学祭の折りに「ロラン展」なるものまで開いてしまった。宮本先生の御好意でお借りしたロランの原書の展示を軸にしたものであったが、それを知ら

れた片山敏彦先生
が送ってくださった
「ロマン・ロラン」
という詩稿も大喜び
で展示した。

尾埜さんはその二
つをゆっくりりじっく
りと眺めやり読んで

いき、そのあと二人のロラン談義に花が咲いた。——
話は尽きず、次にお会いした大阪の街では通りを往き
つ戻りつしながらロマン・ロラン、ロマン・ロラン……と
口を「ロ」の字にして話し続けた。あの長い通りを何往
復したことか。

尾埜さんとおつきあいは、そのときこのかたのこと
だから、半世紀をこえている。尾埜さんは弁護士に、こ
ちらは教師になったあとも、顔を合わせると「ロマン・
ロランが……」「ロマン・ロランは……」と旧知のおじさん
の話をしたいに、親愛の情をこめて話に花が咲き、飽きる
ことがなかった。——

ロマン・ロランを軸にしたおつきあいは、そのあとも
途切れることなく続き、お互いが仕事のことから名古屋

やら東京やらで暮すようになって同じ案配で——顔を合わせる時、「ロマン・ロランおじさん」の話でもするようになる、いつだってロランが皮切りになった。

尾埜さんの誠実さ、篤実なお人柄のことは、つき合われた方なら、その日からお分りのことだろうが、弁護士と童話作家という、一見風変わりな取合せの二人組が会えば、いつだってロランから話の花が咲き、二人にとってのすてきな伯父さんの話のようにもあがって、飽きることがなかった。とにもかくにも二人とも、ロランとその周辺の本は読み続け読み返していたお蔭で、話のきっかけはいつだってロマン・ロラン——であった。

これもロランで知り合えた大学の先輩松居直さんとおつき合いから、わたしは教師をやめたあと、福音館書店に勤める身になった。松居さんのお世話で、そのあとリーダーズ・ダイジェスト社に勤めることになった。それから理論社の嘱託になって本づくりをする身になり、東京をかけめぐる…。

一九六八年に京に引越し、一息入れたあと『ぼんぼん』

なる長編を書くことになる。女子短大のセンセになり児童文学を論じながら書き続けることになる。

尾埜さんとは再会というか、関西の風土の中でのおつき合いになり、お忙しい身の弁護士さんゆえ、つかずはなれず」といったことにもなる。しかし会えばロランを口火に読書談義人物談義に花が咲いた。

しばらくあとのことになるが、京の暮れには一緒に落語会を愉しみ（おいしいうどんやさん「権太呂」が主宰するもの）、尾埜さんの天衣無縫な高笑いを聞くことになる…。

尾埜さんはお仕事柄とはいえ、ロマン・ロラン研究会の軸として長いこと誠実冷静に（しかし、こころはあつく）つき合ってこられた。わたしの方は野次馬みたいに、その横でぼんやり坐っているばかり、それでも尾埜さんとロランの話になると、昔日のよしみ^あが戻って、研究会の終わったあとも、京の街を歩きながらのロラン談義に飽きることはなかった。

尾埜さんは「法律」、わたしは「童話」の傘をさして歩きつづけてきた。ときには黄金色のロラン色の夕映え

のなかで、ロラン色の星の下で……。

いつか、子どものためのロマン・ロラン伝を書くつもりだと洩らすと、尾埜さんはせいぜい、長生きして待ってしましょーと言うて下さった。それなのに、それをお目にかける前に尾埜さんは逝ってしまわれた。

いまごろは多分、あちらでロランを訪ね、音楽を軸に話し込んでやるんとかがうやろか——と、ときどき思いながら、些か嫉妬している。しかし誠実で有能なロランディストの一人として、尾埜さんはそんなロランとの対話をノートにするし、ひょっこりとこちらに送って下さるような気もしている。そんなことになったら、こちらとして、そのノートを軸に「ロランとの対話―尾埜版」といったものを書くことにもなる。尾埜さんの長年のロランへの敬愛、私どもの友情のしるしの一つとして、それはしっかり書きあげなければ……と思う、きょうこのごろであります。

書きあがったら宮本さんちへお届けして読んでいただき、私が知らない研究会での尾埜さんの「言行録」も聞かせていただき「続編」も書かねば……と思う。そうして

こうして、ロランを軸にしたふたりの友情はまた、続いていくことになる……。



ロマン・ロランセミナーにおける尾埜善司氏と今江祥智氏

尾桊善司 略歴

昭和六年 (一九三二) 二月二十一日大阪府南河内郡(八尾市)で生まれる。

昭和二十七年 (一九五二) 司法試験第二次試験合格。

昭和二十八年 (一九五三) 京都大学法学部卒業。高校時代にロマン・ロランを愛読、大学入學時に宮本正清を訪問。学生主催のロマン・ロラン展で今江祥智と出会う。

昭和三十年 (一九五五) 司法修習生を経て弁護士登録。(大阪弁護士会)

昭和三十五年 (一九六〇) 勸日仏文化協会・評議員。

昭和四〇年 (一九六五) 大阪地方・簡易裁判所調停委員。

昭和四十六年 (一九七一) 勸ロマン・ロラン研究所・監事。

昭和五十七年 (一九八二) 大阪府公害審査会委員。

昭和六十年 (一九八五) 大阪弁護士会会長、日本弁護士連合会副会長。

昭和六十三年 (一九八八) 勸ロマン・ロラン研究所理事長就任、一九年間在任。

平成十年 (一九九八) 大阪国際大学政経学部教授(民事紛争処理論・裁判文化論)。

平成十三年 (二〇〇一) 叙勲、日本国、勲三等瑞宝章。

平成十七年 (二〇〇五) 仏国共和国教育功労章(パルム・アカデミー・オフィシエ) 授章。

平成二十年 (二〇〇八) 第一次世界大戦終結90年記念—ロマン・ロラン国際平和シンポジウムで、ヴェズレーの世界遺産マドレーヌ教会で宮本正清の詩集「焼き殺されたいとし子らへ」「わらい」を朗読。

平成二十二年 (二〇一〇) 十二月十五日、西宮市内の病院にて肺炎のため死去。

甲子園浜を守る公害訴訟の原告弁護団長。国際商事仲裁人。交通事故に便乗し、保険を悪用し病気をでっち上げ高額治療費を取る外科病院を訴追するなど環境、社会の不正と向きあった。大阪放送番組審議会委員、毎日放送ワイドショー・レギュラーなど多岐にわたって活躍。

関西日仏学館(勸日仏文化協会の雇用問題、レストラン立ち退き問題で学館代理人弁護士として尽力した。合唱団のテノール、写真など趣味でも多彩。

著書・訳書

訳書「裁判所にて」ガブリエル・バンサン著作 尾桊善司訳 (一九九六年 ブックローン出版)

著書「指揮者・ケンペ」(二〇〇〇年 芸術現代社)

ロマン・ロラン関係

ユニテ寄稿論文

「宮本正清さんと一人の学生」(No.20 一九九三年)

「ロマン・ロランを語る」(No.21 一九九四年)

「ロマン・ロランと大震災」(No.26 一九九九年)

「ロマン・ロランの作品による音楽とレコード」(No.31 二〇〇四年)

『ビエールとリュース』をめぐって(No.34 二〇〇七年)

「ロマン・ロランを『あたま』でなく『からだ』でよみ・きく」(No.36 二〇〇九年)

追悼

「佐々木昌義理事とともに」

小尾 俊 人

私たちの研究所（ロマン・ロラン研究所）の始まりから専務理事としてご努力をいただいた佐々木昌義先生は、昨年三月十三日、九十六才の生涯を終えられました。

私は、六十五年の間、ともに親しい時間を過ごさせていただきました。ロマン・ロラン全集の企画と発行、また、日本ロマン・ロランの友の会の出立、また研究所の創設すべて先生とともに、私の存在はあったのです。

*

先生の若い日々について、私を知るかぎりのことを記したいと思います。横浜生まれ（一九一三）、眼の人、耳の人として天与の才能に恵まれた青春の十九才、たまたま片山敏彦の文章「ヘルダーリン」を読む機会がありま

した。それは、

「今は四月の優しい夕暮れです。金色こんしきを含んだバラ色の雲は、おもむろに■ざめ、スミレ色になり、夜の濕氣の中に、憂うつなひたいのようになだれて行き、空には未だひばりの歌の悲しげな金粉が、一日の終りの歌となって■畑の上に漂うています。空には、星の光が目ざめようとしています……」

感激と陶酔、いくたびもの逸はやる心に、ついに堪えきれず、胸をドキドキさせながら、彼（以下、先生を彼と略称します）は、東京・武蔵野の片山家の玄関に佇みました。片山先生はこの若い知己の友を素直に、温かく招き入れました。いらいこの交情は生涯変わることはありません

でした。

彼の若き日の精神遍歴は小説『心やさしい友』のうちに描かれています。昭和十年代初期、二十才台の心象風景です。片山先生を慕い、上智大学から師の大学・法政に移り、彼はそこで、また長谷川四郎や原田勇、大野正夫らの新しい友人を得たのです。彼らはともに詩の雑誌『花粉』を作り、発行所は彼の自宅に置かれました。

*

卒業後、昭和十三年十二月、彼は習志野騎兵第十三連隊に入営、のち、内蒙古の包頭パオトオに転属になりました。

彼は戦地から手紙を書いています。（片山敏彦『心の遍歴』一九四二、所収、「若き友の手紙」。）

「任地から十数里離れたある町へ、出動を命ぜられて来ております。昨日の明け方敵襲があり、頭上を通る弾丸の唸りを初めて聞きました。唯今も討伐のための待機態勢で居ります。」（以下十七行、カッコ内のみ彼の手紙文）

任地は大きな町である。その郊外の片丘に戦死者たちの塋域がある。「その表に柔かな春の日ざしが流れて、

丁度、かたわらを緬羊の群れが白い塊となって通りすぎでゆきました。」すべて静かな物象のなかで、一瞬間、Sの心は回想のとりことなった。

しかし頭を回らして涯知れない平原の奥を眺め、連なる山々を振り仰ぐとき、Sは死者の沈黙より更に深い静寂を実感する。

「すでに幾度となく味わってきたこの実感をここで再び切に繰り返したとき、僕を緊めつけていた暗い気分はほどけて、ほのぼのとした光が内部から輝き出すかのようにでした。それは人間感情の振幅を主観の限度で揺れていた魂が次第に動き止んで沈静してゆくためでした。いわば自然の絨氈の中へ、人間的運命をゆだね、穏かに織り入れる思念、スピノザ||ゲートの観想がよみがえったためでした——それから以後、二つの明暗の環が心のかで廻転しています」

*

彼が一生のうち、ぜひ作品にしたいと思いつつ、いに完成しなかった作品は、この軍隊生活にかゝわり、

小説『心優しい友』の続篇になる構想のものです、私がかつて、軍隊の体験について彼の談話を書き止めたノートによって、その一部をつぎに再現してみようと思いません。

乗馬訓練の初年兵として経験。

—— 招集命令がかかり、整列のため、身をとこのえようと思廻わすと自分用の乗馬用長靴がない。誰かに盗まれてしまったのだ。仕方なく衛内靴を代用して列に加わった。これを見た小隊長（幹部候補生出の中尉）は佐々木に向かつて言った「怪しからん、盗んで来い」佐々木は答える「私は、生まれてから盗んだことはありません。厭です」隊長「命令にそむく気か、反抗するのか、怪しからん」隊長は佐々木の横顔を、上靴の裏革でなぐった。夜、消燈時間。喋る者あり。「これでは眠れない」と云うと、准尉は怒っている「お前は何様の子か、華族の子か、大金持の子か、精神病院へ入れてやる」と。佐々木「入れて下さい。その方が、此処よりマシです」そうして、小隊内で処分が検討された。保証人として片山先生の名前を云わされた。先生は呼び出しを受けた

（当時、法政大学のドイツ語の先生）。話を聞いたのち、扱いは少し叮嚀になった。それは、共産党員のような組織的な抵抗者でないことが判明したからである。

中隊では会議の結果、三笠宮が中隊長という部隊の名誉のため、事故を起こしたくない、という事情があり、「第一期四カ月の訓練が終った段階で、外地へ転属させらる」という処分が決定した。

つぎは、満州から内蒙古の包頭バオトに移る。

現地の中隊長が佐々木に言った「お前の身上調査書に「反軍思想アリ」とある。尻の穴からヤニが出るほど、きたえてやる」と。

初年兵三カ月の二日目に、厩（うまや）の当番になり、あまりに人が足りないので、人員ましの要求を申し出たら、これがまた問題になる。

あるとき、口の利けない中国人のクーリーが撲られるのを見、思わず「やめて下さい」と止めに入った。兵いわく「お前はチャンコロ（中国人への蔑称）の味方をするのか」と。

この中国人は、のちに佐々木が天秤棒をかついで喘い

でいたとき、彼に替って助けてくれた。また馬の飼料の秣（まぐさ）を切っていたとき、その中国人が、みごとに切って助けてくれた、ということもあった。佐々木もまた、内地の母が送ってくれた菓子を彼にやって報いた。そうした生活であったが、ついに病院入りとなり、軍務不適で除役、内地送還となった。昭和十六年、三年ぶりで平常に戻ったのであった。

前に引用の片山先生あての手紙は、こうした状況の中で、発信されたものです。

足かけ四年の軍隊生活ののち、兵役免除で帰宅となりました。昭和十六年、二十九才でした。そして気象技術官養成所へ就職、ドイツ語の教師となりました。

昭和十九年に片山先生は、私家版の詩集『暁の泉』を出版されますが、このとき、先生は、佐々木に対し、「君も僕と同じ形で詩集を出さないか、費用は私が持つから」ということで『照翳詩集』五百部が活字となったのであります。この二人の友情の篤さは、まことにこの世には稀れなものであったと思います。

*

昭和二十年五月のB29による横浜空襲は、佐々木家をも焼きはらいました。片山先生は昭和十三年以来、一高教授でしたが、昭和二十年辞任、六月空襲と食糧事情のため軽井沢の大学村に疎開され、杉並の先生の自宅は、住居を失なった戦災被害者の佐々木に一時的に託されたのです。

そして、八月十五日が来たのです。佐々木は片山あての葉書に「哀歓」の言葉で、この巨大な転換の感情を表現しています。祖国の運命への哀しみ、そして閉ざされていた国家がついに、世界にむかって開かれたのです。

私がロランの出版に携わることのできたそもその始まりは、彼との接触ができたことです。彼は当時、気象技術官養成所のドイツ語教師でした。私の弟の亮はその生徒で佐々木を敬慕していました。亮が私に『照翳詩集』の著者としての佐々木について語ったのが始まりです。『照翳詩集』を新しく出し直す話があり、しかし、まず

片山先生に相談して、ロマン・ロラン全集より出版活動に入る事がまず第一の仕事である、ということになりました。



一九四六年の春、雪深い信州塩名田の先生の疎開先におたずねし、おねがいしたのは、昨日のことのように思われます。先生は大変喜んで下さいました。早速、

京都の宮本先生にも御紹介下さいまして、全体のプランがみごとに出来上がりました。片山先生は大正十五年(一九三〇)ロランの『愛と死との戯れ』を叢文閣から出し(つづいて、築地小劇場で公演)、ていらいロランの伝記も書かれ、著者の深い信頼を得ておられました。私の戦後はこうして始まりました。当時先生は四十八才、佐々木先生は三十三才、私は二十二才でした。先生方が若輩の私に寄せて下さいました御信頼は、ふつうの常識を超

えていると思われれます。私の一生はこの一線によって決まったのです。

当時二ページのペラ新聞の『朝日』に出た小さな広告の反響は、絶大でした。第一回配本『時は来らん』はアメリカの占領行政の検閲下では不許可、至急さしかえて『獅子座の流星群』(一九四六年・九)となりました。以後、大体において順調にすゝみ、一九八五年十二月には全43巻を出版することができました。

第一回配本が出たとき、この装幀(片山敏彦)をみた丸山眞男先生は思わず「あゝこれが戦後だ、戦争が終了のだ」という感銘の言葉を下さいました。大変うれしく思ったことを忘れることができません。

*

一九四八年六月に、日本ロマン・ロランの友の会創立記念の講演と音楽の会が東京で開かれました。翌四十九年六月には、京都で同様の発会式が開かれ、このときには、佐々木先生も、「ロマン・ロランと音楽」のテーマでお話をされております。

佐々木先生は、ロマン・ロランの全集には「十六世紀

イタリア絵画の彫落」ベートーヴェン研究の「エロイカからアパシヨナータまで」「フィニタ・コメディア」の翻訳で御努力いただきました。

「友の会」はいろいろの経過をへて、とくに一生をロランのために献身された宮本正清先生の、私財を投じて財団法人組織とされた「ロマン・ロラン研究所」というかたちで、現代の活動をつづけております。そして佐々木先生は、その当初よりの常任理事として、大きな貢献をされました。私の感謝これに尽きることはありません。

*

佐々木先生のお仕事は、八・一五以前には詩と小説に注がれていましたが、八・一五以後はその重心を文化社会学に移されました。これは、戦後すぐにはじまった丸山眞男先生との友情と尊敬から始まったものと想像します。この二人の意図から、佐々木先生がオルガナイザーになって作られたのが「柀(ひいらぎ)会」です。会員は丸山眞男、辻清明、佐々木斐夫、猪木正道、石上良平、福武直、日高六郎、島崎敏樹、飯島衛など、それぞれ、

違った専門分野を持つ学者が、自分の研究について語り、それについて他の会員が批評雑談をする、という気のおけない、自由な集まりでした。勿論、欠席も自由、茶菓代はワリカン、会場事務はみすず書房が引き受けました。箱根、伊豆、蓼科などへの旅行もありました。どこまでも私的な集いでしたが、公的には一つの成果がありました。当時はマルクス主義全盛の時期で、科学はすべてその奴隷であるような、社会科学は唯物論絶対の前提に立つべきもの、というような風潮でした。柀会メンバーは、複数の社会科学を志す、いわば同志だったといえるでしょう。『社会科学入門』を共同編集して出版したのです。印税は柀会の費用に当てる、ということにもなりました。これは彼なくしては、存在しなかったグループであり、また戦後の表現の自由のあらわれの一つとも見ることでできます。

なお、彼は成蹊大学で、政治経済学の講座をお持ちでしたが、六十一年大学に文化学科創設を提示し、オーガナイザーとして文部省との交渉にあたり、官僚をして「文化学科なんて、かつて前例がない、わが国の初めて

の申請だ」といわしめた、と聞きました。そして、その新学科のゼミから多くの有識な研究者を世に送りました。故・山下俊一の著書『ロジシスト・ルソー』（一九九二）はその成果の一つです。

彼の人間と学問は深く、広く、そして基準はその質の高さにありました。丸山先生との友情は厚く、相互の信頼は家族ぐるみだったと思います。その心おきない関係は、先生の名著『アイデアとエスカトン』の七九三頁に記述されております。

「ちなみに十年（一九八七年頃か）ほど前に、私は友人の丸山眞男（政治思想史家）に尋ねてみたことがある。神や宗教や宇宙に関しての彼の所存を……。私は彼が答えなにかと思った。しかし、おそらく好意的な配慮から、かりそめの哲学的な答えを返してくれた。「……私は既成のどの宗教にもどんな形でも与しえない。しかしこの大宇宙はふしぎな存在だ。まるで巨大な〈意志〉や〈力〉をもって創出され、永遠に持続するものであるかのよう……。その果てしない存在性の奥深い本質に、私はある種の畏怖を感じる……」と。この種の信念や思想の奥

処^がをめつたに洩らさない彼の、ある意味での感慨を思わず開披した趣意^しを、私は共感をもってここに記しておく。地球の自然は、ギリシア人が感じたように、私たちの故土であり、宇宙世界の遠奥は、ヘブライ人が感じたように超絶的な自然であった。これに對してあらゆる利便を具えた大都会はおそらく人為の虚像そのものであるだろう。」

この結語は、若き日に『ジャン・クリストフ』に感銘し、一つの志操で一生を貫いた佐々木、丸山の基本信條であります。ゲート、ペーターヴェン、ロマン・ロラン、シュヴァイツァーとその精神においてつながる《自然》への畏敬を、私たちにあらためて感得させます。

（二〇一一・一・八）

佐々木昌義（斐夫） 略歴

- 大正二年（一九一三）八月二十九日、横浜で生まれる。
昭和十三年（一九三八）法政大学哲学科卒業。在学中片山敏彦に師事。友人に長谷川四郎がいた。同年十二月、習志野騎兵連隊入営、内モンゴルで足かけ四年、兵役に服した。昭和十六年（一九四一）陸軍病院除役。
昭和十七年（一九四二）中央气象台・氣象技術官養成所教官（ドイツ語）
昭和二十四年（一九四九）成蹊大学政治経済学部教官。（文化社会学）
昭和二十四年（一九四九）日本ロマン・ロラン友の会設立に委員として参画。
昭和三十四年（一九五九）博士号取得。文学博士。
昭和四十二年（一九六七）半年にわたり西欧歴訪。
昭和四十六年（一九七一）勸ロマン・ロラン研究所 常務理事、在任三七年。
昭和五十四年（一九七九）成蹊大学退職。在職中は文化学科をわが国で初めて創設。
また文学部長、図書館長など歴任。門下に多くの研究者を育てた。この間、東海学園、中央大学、法政大学、高知県立女子大学で講師などでも、影響を与えた。
昭和五十七年（一九八二）成蹊大学名誉教授。
昭和六十年（二八八五）叙勲（勲四等旭日小綬章）。
平成二十二年（二〇一〇）三月十三日、京都市内の病院で老衰のため死去。

主要著書

- 『照翳詩集』（一九四四年 私家版）
『心やさしい友』（一九七七年 みすず書房）
『狂気と文化』（一九八〇年 東海大学出版会）
『認識社会学の方法序説』（一九八九年 いなほ書房）
『イデアとエスカトン』（一九九七年 みすず書房）
その他論文多数。

主要作曲

- 『佐々木斐夫歌曲集』一、二、三（一九八四—一九八五年、東京音楽社）

主要訳書

- 『フロイド』シュテファン・ツヴァイク著（一九五二年 みすず書房）
『16世紀イタリア絵画の凋落』ロマン・ロラン著（一九八二年 みすず書房）
『ペーローヴェン・エロイカからアバッシヨナータまで：』ロマン・ロラン著（一九六八年 みすず書房）
『フイニタ・コメディア』ロマン・ロラン著（一九八〇年 みすず書房）

ロラン関連論文

- 「ロマン・ロランの生涯」（新日本文学 一九五二年十二月号）
「自伝的諸作品について」（ユニテ第十九号 一九九二年）
「静かにやさしき顔」宮本正清没後十年（ユニテ第二十号 一九九三年）
「ロマン・ロランと日本」（ユニテ第二十八号 二〇〇一年）

〈ユニテ・フォーラム〉

ロマン・ロランの『周航』を読んで

馬 淵 岳 大

二〇一〇年五月二十九日、第二八五回の定例読書会で「周航」を読んだ。以下に、その内容を紹介したい。

その前に、簡単に私とロマン・ロランの出会いを述べたい。私のロマン・ロランとの出会いは比較的遅く社会人になってからだった。学生時代に、渡辺一夫の本の中に引用されていたロランの『戦いを超えて』の一節が沁みていたものの、実際ページをめくってもなかなか読む気が起こらなかった。

それがある時、『ペートーヴェンの生涯』を手にとって、その序文から心を奪われた。社会に出てから経験した様々な悩みと呼応したのだと思う。さらにロマン・ロランのいくつかの作品を夢中になって読んだ。『ジャン・

クリストフ』は身体中に沁みこむような心情の交歓があった。どの作品からも共通して自分が感じることがあった。それはロマン・ロランの作品を読むと、日々の生活の中で曲がっていた自分の心が正しく直されていくような不思議な感覚である。今回、「周航」を読んだことは、その源泉を探るいい機会になった。

「周航」は、『内面の旅路』（副題は「一生涯を回想する精神の夢」）の第九章にあたる。そこにはロランが生涯にわたり書き続けた作品群の背後にある思想、運命との葛藤、辿り着いた境地が描かれている。なお、一九二四年七、八月に書かれた後、一九四〇年九月に書き加えられている。

最初に「周航」を読んで、非常に驚いたのは、ロマン・ロラン自身は周りから理解されていないと打ち明けていることである。

「……攻撃され、弁護され、けなされ、褒められた私は、フランスの内でも、またフランス以外の国でも、実に理解されていない。……」(P五〇九)

こんな文章に接すると、「自分はロマン・ロランの作品から感銘を受けたが、本当に彼のことを理解しているのだろうか？」という不安な気持ちになった。しかしながら、ともかくも読み進めてくと、次第にロランの人生を追体験していくようになる。

まず、一八九〇年にローマで書かれたノートからの引用や、初期の戯曲群を書いた後のノートの引用からロランの出発点、使命感を感じた。

「……どうしたら単純な人を内的な神の発見へみちびくことができるのか?……」(P五二二)

一八九五年から一八九八年にかけてロマン・ロランは初期戯曲群(『聖王ルイ』や「フランス革命」戯曲連作

など)を発表する。ロランはそこに「民衆演劇」の実現を目指していたが、それは果たされなかった。様々な障害があったとのことだったが、彼自身にとってショックだったのは「民衆」や「俳優」がいなかったということであった。

一九〇一年からの転換点は興味深い。様々な挫折、孤独を経験し、その試練から内面的な仕事に入り、ついに門が開かれるのである。

『悩みをつきぬけて、歓喜にいたれ……』(Durch Leiden Freude) この言葉の意味が、あのときの私を解放し、私には転期がきた。(P五二〇)

また、下記の言葉も印象強い。

「……私は自分が苦勞したので近い他人の苦勞が解った……」(P五二二)

「……「絶えず死んでいくことの喜びであるところの、自分の生を与えるその喜び」が湧き出た……」(P五二四)

『ベートーヴェンの生涯』(一九〇三年)と『ジャン・クリストフ』(一九〇四年〜一九一二年)が上記のよう

な魂の働きによって産み出されたことを知ったのは、心に響くものがあった。また、自ら創った『ジャン・クリストフ』の制限が窮屈に感じられて、『コラ・ブルニョン』（一九一三年）が生まれたという話しも興味深い。

一九一四年に第一次世界大戦が勃発してから、ロランの人生は初期とは異なる次元の困難な道に入っていくのを感じた。戦争の始まったその年に、滞在していたスイスから『戦いを超えて』を発表するが、その思いは以下のとおりである。

「私はその役目を果たした。……私を私自身から奪い取って私に一つの重荷を担わせ、私が自分で求めたわけではない一つの義務を遂行させる主を呪いながら果たした。」（P五三八）

その結果、今まで築き上げた二〇年に亘る友情を失う。ただの一言でロランは周囲から否認される。また、戦乱の中でロランの母が亡くなり、多くの友が失われていく様は悲痛であった。

一九二四年からの「アジアとの出会い」は、ロランの魂の強さや深さを感じた。

「……一九二四年の当時には私は、ヨーロッパという境を踏み越えて、『美しいユーラジー』（ヨーロッパとアジアとの調和）への道を歩いていた。」（P五四五）

タゴールの「東京での講演」を知り、その後深い交流が始まる。またクリストフの「燃え立つ茂み」や『リリュリ』などがインドの人々の精神と親しいことを知る。さらに、日本からの便りも触れられており、当時、ロランと交わった人たちによる仕事の恩恵を自分は享受しているのだと、何か身近になる思いがした。

これらの魂の交流から、ロラン自身のライトモチーフを教えてもらったことはこの読書会のハイライトであった。

「……生命のあるものらのさまざま相違なる声々によって、また不協和音そのものによって、織りなされている「最も美しい諧和」^{ハーモニー}、それはヘラクレイトスの次のことばによるものである。

不協和によって作られる最も美しい和音……」

(P五五二)

更に『魅せられたる魂』の執筆がこの頃に行われたのを知った。この不思議な題名の秘密の一端を知ることができた。

しかしながら、同じ一九二四年からの不穏なできごとがロマン・ロランを夢から現実につれもどし、再び戦争、抑圧への反対宣言、活動を行う役目を自らに課す。その活動と並行して『魅せられたる魂』の執筆も続けられていたのである。その様子を讀むと、ロランの人生は自らを犠牲にした“人間”の生涯を感じさせる。

その闘いの最期で、ロランが書き記していることを以下に引用する。ロマン・ロランの出发点、使命感が、困難な航海を通じて、強められ豊かな実りになっていたのを感じる。

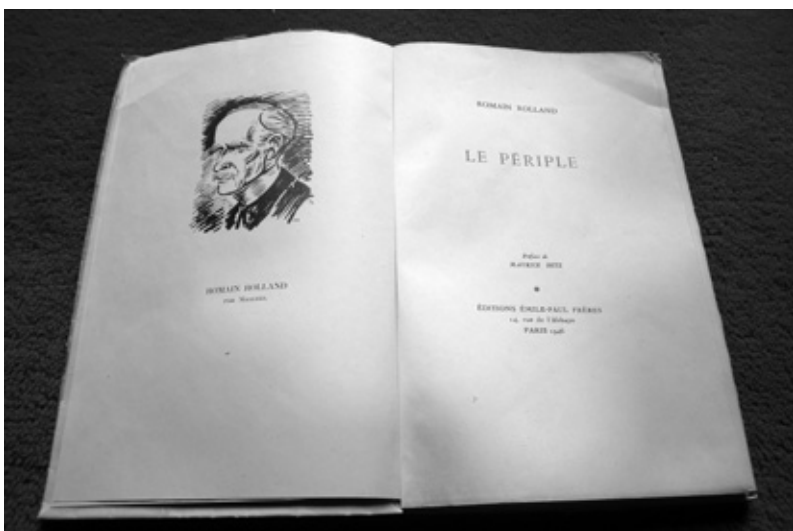
「……私の全生涯は外観においては敗戦の連続であった。……しかし私の内面にいるコラとクリストフとが私に言う……勝利は私のものである。というわけは、私が欲するものは何であるか？ 私が欲するのは、人類をみちびいている諸法則が勝つことなのだ。」(P五六四)

「神々のほたらきにゆだねよう！……盲目の諸国民を導いている《運命》の知性にまで君が君自身を高めることができぬなら、おちついて、しっかりと、しんぼう強くあるがいい！《運命》は、その君のためにはたらく……」(P五六四)

また、「周航」の最後で以下のように人類への信頼、樂觀を述べていることにも感ずるところがあった。

「……私の《周航》の終結に当って……この旅が私にこの人類の生地(きじ)にさわらせたが、ずいぶんかき裂きはありながらも、この生地はじょうぶだと私は堅く信じさせられた。」(P五六五)

「……ころがる地球とともに、彼人間を、石投げ器の一つの石のように投げ飛ばしている諸法則を見る。そして彼人間の《コスモス(秩序的宇宙世界)》を見る。——その《コスモス》は落下して行く——生の楯円の、見えない中心に向かって。そして魂は、はれやかに、弾道の弧線のかたまりを見定めようと努める。」



ロラン死後出版。Le périple『周航』

今回、「周航」についての読書会で、集まった皆様と話し合い、いろいろな意見を聞くことができた。ロマン・ロランへの想いはそれぞれの方々が大切に持っているのを感じた。それはロマン・ロランの多様性を示しているとも感じた。一人で読んでいたら気がつかないところが沢山あるのである。初めの不安は消え始めた。今後ともロランの作品を丹念に読み続けていきたい。

ロマン・ロランを通して広がった世界

黒柳 大造

読書の魅力には、向かい合う作家・作品への理解を深めることもさることながら、ある作家・作品を通して別の新しい作家・作品の世界の扉を開く機会を得られることもまた挙げられる。筆者も、昨年から取り組みを開始し、現在約三十名について原稿が完成した「日本のロラン受容に貢献した人々」(仮題)を執筆した。そこで多くの日本の知性達の世界―著書・研究から学ぶ彼らの思索・思想―に出会うことができた。この魅力を再認識したばかりである。

本稿ではこの視点から、筆者がこれまでロマン・ロランを通して知ることができた世界―その中でも特に印象的であった欧州の三名―を紹介する。いずれも日本では一般には知る機会の少ない欧州の代表的な知性達であり、

ロランを学ばなければ彼らと出会う機会はなかったであろうこと考えると、その意義の大きさが実感される。

(1) E・R・クルティウス

(2) I・バーリン

(3) T・G・マサリク

E・R・クルティウス(一八八六―一九五六)はアルザス出身の文芸評論家。古典から近・現代にいたる欧州文学への深い造詣に立脚したその独・仏精神文化の比較・考察は、ロランが追求した独仏の国境を越えた相互理解への、文芸思想研究の視点からのアプローチと考えることができる。また、日本ロマン・ロランの友の会編「ユニテ」(第一期・第六号)に掲載されているクルティウスのロラン宛書簡からは、クルティウスのロランに対する

る深い敬意を感じ取ることができる。

I・バーリン（一九〇九〜一九九七）はロシア出身で英国に亡命した哲学者。ひとつの世界に複数の互いに相容れない価値観・思想・文化が併存することを許容する多元的文化論を主張。ロランが希求した国家や民族の枠にとらわれない「精神の独立」と並び立つことができる思想である。数年前の東京読書会における小尾俊人先生のお話やその著書「昨日と明日の間」（幻戯書房）が、筆者がバーリンを読むきっかけとなった。

T・G・マサリク（一八五〇〜一九三八）はチェコ・スロヴァキアの哲学者、政治家。ロシア・東欧の精神史研究（歴史・宗教・哲学）やそれに基づくドストエフスキーを中心とした文学研究で知られ、また、同国の初代大統領として人々の尊敬を集めている。東欧の小国の視点から民族独立・平和を求める姿勢は、方法論の詳細は異なるもののロランと共鳴するところが大きい。ロランもマサリクを深く信頼し、タゴールへの助言を依頼する書簡を送るなどの交流があった。

欧州の碩学ばかりになったので、最後に中国、日本の

碩学についても併せて紹介する。

（4）魯迅

（5）恒藤恭

魯迅（一八八一〜一九三六）についてはロランの魯迅宛書簡の有無ばかりが注目されるが、重要なのは近代中国においてロランを含む西洋文化の受容を冷静に見つめた知識人としての思想である。魯迅はその講演の中でロランとトルストイ、そしてラッセルについて、当時の中国にはいない真の知識人であるがその理念・思想は現実の世界政治とは乖離している、と明確に述べている。そこに知性とリアリズムの双方に立脚している魯迅の冷徹な眼を実感できる。なお、筆者は魯迅についてはこれから本格的に読み込む予定である。

恒藤恭（一八八八〜一九六七）は法哲学・国際法の権威。大阪市立大学元学長。戦前、滝川事件で京大を辞職。戦後は末川博（立命館大学元総長・ロラン研究所元理事）等とともに平和活動に取り組んだ。恒藤の平和論の特徴である「世界民」の思想については彼の著書「世界民の立場から」（生活社）の他、「恒藤恭の思想史的研究」

〔広川禎秀・著・大月書店〕や「恒藤恭とその時代」〔関口安義・著・日本エディタースクール出版部〕などでの概要を知ることができる。

また、筆者は大阪市大・恒藤記念室でロラン十年祭記念講演会における「世界平和の理想と現実」の恒藤自筆の講演メモを閲覧・筆写する機会を得たが、紀元前・ローマ時代から現代までの世界史を俯瞰した上で主テーマである現代の平和問題を考察するその論旨展開は、多くの著書などにもみられる恒藤の特徴であり、その視野の広さと思索の深さが実感された。

なお、恒藤は「日本ロマン・ロランの友の会」顧問、「ロマン・ロラン生誕百年祭委員会」名誉委員などを務め日本のロラン受容にも貢献。旧制一高で同級の芥川龍之介、成瀬正一などロランの「トルストイの生涯」翻訳メンバーと交友が深かったことでも知られている。

【主要著書紹介】

〈E・R・クルティウス〉

「現代フランスの文学開拓者」〔白日書院〕「ヨーロッパ

文学とラテン中世」〔ヨーロッパ文学評論集〕「フランス文化論」他五冊（以上、みすず書房）など。「現代フランスの文学開拓者」はロラン論を所収。他書でもロランについて言及している箇所は多い。

〈I・バーリン〉

「自由論」〔ある思想史家の回想〕他三冊（以上、みすず書房）、「ハリネズミと狐」〔ロマン主義講義〕、「バーリン選集（全四巻）」（以上、岩波書店）など。

〈T・G・マサリック〉

「ロシアとヨーロッパ（全三巻）」〔マサリックとの対話〕（以上、成文社）「マサリックの講義録―チェコ・スロヴァキア小史―」〔恒文社〕など。

〈魯迅〉

「魯迅選集」〔岩波書店〕「魯迅文集」〔筑摩書房〕「魯迅全集」〔学習研究社〕など。「阿Q正伝」「藤野先生」などの有名作品は文庫化されているが、思想・歴史・文化論などは各著作集などの参照が必要。

〈恒藤 恭〉

平和論では「世界民の立場から」〔生活社〕「憲法問題」〔岩波書店〕など。随筆家としても知られていて「旧友・芥川龍之介」〔朝日新聞社・他〕「復活祭のころ」〔朝日新聞社〕「翡翠記」〔島根国語国文学会〕などの随筆集がある。また日本少国民文庫の「人間はどれだけの事をしてきたか」〔新潮社・他〕も広く親しまれている。

東日本大震災と『魅せられたる魂』——予告するもの——

宮本エイ子

東日本大震災は地震、津波そして原発、この幾重にも重なった未曾有の災禍は信じがたい衝撃で目を疑った。

これが天の遣いなのだろうか。予告なしの自然の猛襲は世界人類への警鐘としてはあまりにも過酷な代償である。便宜さ快適さを追求し、傲慢になったわたしたち現代人の大命題として受け止めたい。高エネルギー、大消費の

現代生活と人生観を根本的に見直さねばならないだろう。

しかし、なぜ宮沢賢治が代表する心やさしい東北の人たちが、この世のものとも思えぬ夥しい恐怖と苦痛と死を受けねばならないのか？この不合理、矛盾が被災者でない西日本のわたしたちにも痛く重くのしかかり、世界中の人々の心をゆさぶっている。世界からの力強い支援がわたしたち日本人にどんなに勇気を与えていることか。

アメリカのルース大使が現地の避難所を見舞い、老女の手を取って「自然は命や家を取っても、人の魂まで奪

うことはできない」と。政治抜きで感銘深くとらえた私の脳裏をよぎったのは、日本の敗戦時、駐日フランス大使であったカトリック詩人、ポール・クローデルがインタビューに答えて「日本は貧しいが、日本人の魂は高貴である」と。

大河小説『魅せられたる魂』のなかでロマン・ロランは女主人公アネットの友人としてブルーノ・キアレンツア伯を登場させている。

彼は、一九〇八年、十五万人の死者を出したシシリア島の大地震でメッシナの街が壊滅した時の被災者である。家族と邸宅のすべてを失い、絶望の淵で、マリアに罹った少年と出会い、彼を引き取り、被災地と離れた別荘で暮らす。博学な古典学者のブルーノは、日夜、少年にギリシャ神話を語って聞かせ、その思惟がだんだん少年に浸透していく。家族を失ったブルーノは教育者の喜びも

得、愛情も注ぐが、まもなく少年は熱病の発作で逝く。ブルーノは少年の眼を閉じ、体を洗ってやって、ただ一人で、海の方に下る岡の斜面の巴旦杏の若樹の群れのなかに埋める。塚の上にただ一基の石碑を立て、唯一の文字を刻む。『不死なる者』。

彼は『滅びる者ども』の方に戻ってきた。邸宅の廃墟の上には『光明』によって、愛を』と刻まれたキアレンツア伯爵家の楯形が残っていた。「運命」の翻弄による廃墟の下には、キアレンツア家の一族、すべての彼の肉、そして『愛、光明』の炬火は消えた。

その後、ブルーノは遠くインド、チベットの乞食、遊行の旅に出る。帰国して、社会奉仕事業活動に身を呈していった。

一九九五年、阪神大震災のとき、家族、友人を失い深く傷つき希望の見えない日々を送っていた被災女性に、突然、光が見えた。「そうだ、私にはロマン・ロランがある」と、学生時代に愛読したロマン・ロランが思いだされたという。そして、わたしたち研究所の扉をたたいた。

阪神大震災特集グラビア誌のなかに泥まみれの『魅せ

られたる魂』の表紙が写し出されていた。『不死なる者』となつて。

二〇一一年、極東の地日本で、科学文明の結晶であるが、悪と善、表裏一体となった原発が大自然の猛威のまえ、怪物の雄猛びのように豹変し、人々を愚弄している。この困難に東洋人も西欧人もなくすべての世界の英知を結集して克服してもらいたいものだ。

自然と対峙してきた欧米人と異なり、自然の懷で生きてきた日本人のわたしたちが、これまで声もあげずに原発エネルギーを享受してきた。この際、大転換期として、一大議論を巻き起こし、太陽光、風力、水力を生かした自然との共生を図りながら調和のとれた生活とそれぞれの生き方を模索したいものだ。

今回の震災で、日本中が喪中状態に置かれているところへ、私の元にもロマン・ロラン協会会長リエジョワ夫人をはじめフランス、スイス、フィンランドの多くの友人から見舞いのメール、電話、お手紙をいただいた。

「頑張つて」「ありがとう」の心の輪が地球上に結ばれていく。

ロマン・ロラン研究所の活動報告

研究所だより 二〇一〇

* ロマン・ロランの犠牲についての答え

高橋哲哉氏の講演（二〇〇九年十月二十四日開催）——
「犠牲の宗教への問い」——の質疑応答時に「ロマン・ロランと犠牲」についての問いかけがありました。

遠くからデュシャトレ先生が次のようにお返事を

寄せてくださいました。

「ロランがその作品の中に確かに犠牲について触れます。例えば、『ジャン・クリストフ』の『朝』巻末では語り手がクリストフを、苦しみに対して我慢するように励ますところが有名です。ロランにとっては、命とは闘い、争いであり、闘いであるゆえに苦しみや自己犠牲ももちろんあります。十字架上の犠牲に関しては、触れてはいないと思います。しかし、『燃ゆる荊』で、人類の苦悩と犠牲を神様の苦悩と犠牲に重ね合わせて述べる

ところに、その背景に十字架上の犠牲（＝キリストの犠牲）があるのではないかと思えます。「引用中略」そしてまた、『魅せられたる魂』では、アンネットとマルクが彼らの理想（＝彼らの道）を貫きつつ追いつくために犠牲（自己犠牲、命の犠牲）の必然性を覚悟しなければならぬと強調しているのです。

* 講演会 小林多喜二とロマン・ロラン

——反戦・国際主義の文学を求めて——

七月二十四日（土）午後三時—四時半

講師は『蟹工船』の仏語版の翻訳者で東京大学の研究員、エヴリン・オドリ女史です。

彼女は『枕草子』をテーマに学位論文を準備しているだけに日本語と日本古来の奥ゆかしさを兼備しています。少なくともロマン・ロランの魂を深く理解していることがうかがえました。講演内容は本誌に収録の通りです。『蟹工船』の翻訳はフランスの出版元から直接依頼され

たそうです。すでに高校時代に日本留学の経験があり、その日本語力が買われたのでしょう。

* 展覧会 平成二十二年京都市幼児・児童・

生徒作 品展及び姉妹都市交歓作品展

開催期間 九月二十九日(水)～十月三日(日)

午前九時～午後五時

会場 京都市美術館(本館二階)

戦後間もない頃の一九五三年、宮本正清がロマン・ロランの思い出として托されたフランスの子供たちの絵二十八点(研究所所蔵)が日の目を見ました。フランス総領事館京都移転記念として、京都市の幼児・児童・生徒作品展および姉妹都市交歓作品展に、特別出品させていただきますました。日本の子供たちの稲作に関して描いた絵に対するお礼として、フランスの小麦やリンゴの栽培に関する子供たちの絵画です。現代の子供たちの絵と比較すると、画一的でなくそれぞれが個性を發揮したバラエティーに富むものです。時を経た日仏交流で注目を集め、朝日新聞、京都新聞の取材を受けました。

* 神谷郁代。ピアノリサイタル

日時 十月九日(土)午後二時開演

共催 関西日仏学会

後援 在京都フランス総領事館、京都市、京都市教

育委員会。

会場 京都市立京都堀川音楽高等学校ホール

モーツアルト、ベートーヴェン、ショパンと多彩

で感銘深い演奏でした。

一部プログラムの変更がありました。

* 近況

◇ 小尾俊人氏『本は生まれる・そしてこれから』(幻戯書房)、『出版と社会』(幻戯書房)に続く『昨日と明日の間』二〇〇九年九月二十五日(幻戯書房)、発刊されました。

◇ 森本達雄氏 二〇〇九年叙勳瑞宝中綬章。ガンディー『獄中からの手紙』(岩波文庫)につづいて、二〇一〇年『ガンディー』

―インド独立への道―(第三文明社)の翻訳が同封の

チラシのとおり刊行されました。

NHKラジオ第二放送「宗教の時間」、四月から九月までの半年間（日曜日）六回にわたって「ヒンドゥー教の世界とその歴史と教え」についてお話されます。

ご期待ください。

◇ 村上光彦氏 『イニシェーションの旅』マルセル・ブリヨンの幻想小説（未知谷）二〇一〇年出版。

◇ 萩原 葉さん 『パリの葦』（未知谷）二〇一〇年出版。

◇ シュシュ由紀子さん 「ソメイヨシノが開花し、京都が一年で一番美しい季節を迎えました。

昨年はパリにいて、ノートルダム脇やセーヌ河近くを桜色に染める可憐な姿に心躍らせたものです。ただ、石の街では、春を共に祝う農耕民族の一体感を感じられず、それが物足りない気がしました。京都で見る今年の桜はどんなに美しいか楽しみでしたが、日本列島を覆う放射能汚染の危惧から心安らかにお花見もできません。

十 計報 十

ミシェル・ヴァンチュール夫人（画家、詩人）。二〇一〇年七月八日、京都嵐山の病院で死去、享年八十三。親日家で知られたフランス総領事の故アンドレ・ブリュネ氏から「日本好きのフランスの社交界のマダム」として紹介いただき、ロランの思想とは相いれないものもありましたが、京都住民になって以来、賛助会員として十七年近く忠実にサポートいただきました。芸術的、心豊かでミステリアス、十年に及ぶ半鐘山を守る活動を鼓舞。お骨はご主人の眠る南仏に帰る。安らかに。

寄贈図書

- 1、森本達雄氏・B・Rナンダ著『ガンディー』—インド独立への道—（第三文明社）
- 2、フランス、ロマン・ロラン協会 冊子 no25, 26, Cahiers de Brevés
- 3、フランス、クラムシー芸術科学協会 冊子 2010 Bulletin de la Société Scientifique et Artistique de Clamcy
- 4、小森謙一郎氏 思想 六月号、二〇一〇年 no 1034
留保された未来—フロイトと偉大な男たち—

ロマン・ロラン研究所の活動

一九七一	5・15	ロマン・ロランと日本の青年（映画『ロマン・ロラン』上映）	宮本 正清	一九七七	2・10	中国文学とロマン・ロラン	相浦 泉
	11・27	苦悩のなかのインド	森本 達雄		4・20	ロマン・ロランの反戦思想と現代	加藤 周一
	一九七二				6・9	ロマン・ロラン全集と私	小尾 俊人
	6・24	ロマン・ロランとフランス革命	波多野茂弥		9・29	ロマン・ロランの革命劇から——フランス革命二〇〇周年の記念に	中川 久定
	一九七三				11・17	ロマン・ロランとの出会いから	尾埜 善司・今江 祥智
	5・26	ロマネスク美術 ブルゴーニュ地方の教会を中心にして	高井 博子	一九九〇	1・27	ロマン・ロランに負うもの——平和と音楽	新村 猛
	12・18	私の人間観	末川 博		6・2	ロマン・ロランとガンディー	森本 達雄
	一九七四				9・26	『魅せられたる魂』と私	樋口 茂子
	6・29	私の通った芝居の道	毛利 菊枝		10・26	占領時代における日本社会とロマン・ロラン	小尾 俊人
	12・5	ロマン・ロラン没後三十周年記念——講演と音楽の夕べ	佐々木斐夫		11・30	ロラン・片山・ヘッセ	宇佐見英治
			演奏：玉城 嘉子		一九九一		
一九七六	7・11	ロマン・ロランとゲーテ	南大路振一		3・1	ロマン・ロランと私	松居 直
		ユダヤ民族と西洋文明	岡本 清一				

4・19	(財) ロマン・ロラン研究所設立二十周年記念 レクチャー・リサイタル 杉田 谷道	10・15	『魅せられたる魂』を語る(後)	重本恵津子
6・4	ベートーヴェン後期ピアノ・ソナタの夕べ	1・28	いま、ロマン・ロランを語る	
9・27	ロマン・ロランとベートーヴェン ロマン・ロランとデュアメル	9・9	ロマン・ロランと音楽	尾埜 善司・今江 祥智
10・25	ロマン・ロランの思想の二面性	10・14	神秘と政治 ロマン・ロラン、その思索と行動の あいだ	中野 雄
11・29	初めにロマン・ロランあり		ロランとフランス革命	B・デュシャトレ 河野 健二
一九九二	〈大洋感情〉と宗教の発端		自然科学とゲーテ	岡田 節人
6・26	ロマン・ロランとイタリア	12・3	ロマン・ロランとドイツ音楽	岡田 暁生
9・25	ロマン・ロランの革命劇をめぐって		——ベートーヴェン、デュカ他作品	
10・30	宮本正清 没後十年記念追悼会		ピアノ演奏：小坂 圭太	
11・27	静かにやさしき顔	12・24	おはなし「ピエールとリュス」と「また逢う日まで」	今江 祥智
	不思議な静けさ——宮本正清の世界		で	
	自伝的諸作品について		映画上映「また逢う日まで」(監督 今井 正)	
一九九三	ロマン・ロランの演劇的世界	一九九五	ロマン・ロランと日本人たち	小尾 俊人
1・29	ガンディーとロマン・ロラン	1・27	私の歩んだフランス文学の道	片岡 美智
5・24	『魅せられたる魂』を語る(前)	6・2	ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺	岡田 暁生
6・23		11・10		

一九九六	10・30	ロマン・ロラン記念コンサート	ピアノ演奏…小坂 圭太
6・14		ロマン・ロランとの出会いから	鄭 承姫
11・16		レクチャーコンサート	岡田 暁生
	11・25	ベートーヴェン…ピアノソナタ 第21番、28番	村上 光彦
	一九九九	ピアノ演奏…北住 淳	岡田 暁生
11・18	6・11	「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロランと音楽	園田 暁生
	10・8	「日本ロマン・ロランの友の会」五十周年記念	園田 高弘
一九九七		「お話とピアノ演奏」	森本 達雄
1・17	12・1	「主体的精神と普遍の人間愛」ロマン・ロランと	森本 達雄
	二〇〇〇	魯迅	
6・6	10・13	わが青春と一生	佐々木斐夫
9・19		ロマン・ロランと結核の時代	福田 真人
10・4	二〇〇一	ピアノとチェロのための夕べ	
	2・23	ピアノ演奏…北住 淳	青木やよひ
		ロマン・ロラン記念コンサート	今江 祥智
一九九八		チェロ演奏…小川剛一郎	尾埜 善司
6・8	6・23	ロマン・ロランと種蒔く人	柏倉 康夫
9・25		ロマン・ロランと政治的魔術からの解放	柳父 罔近
		コンサート	(財)ロマン・ロラン研究所設立三十周年記念
		「神谷 郁代 ベートーヴェンを弾く」	神谷 郁代

- 12・21 ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー
 デイディエ・シッシュ
 二〇〇四
- 11・22 ロマン・ロランを読みながら 今の世界を考える
 峯村 泰光
- 5・31 戦争と平和、科学を考える
 プリーモ・レーヴィを語る
 ジル・ド・ジェンヌ
- 5・10 ロマン・ロランの作品による音楽とレコード
 尾埜 善司
- 4・19 ロマン・ロラン記念スプリングコンサート
 演奏…ピエール・イワノヴィッチ
 郁子・イワノヴィッチ
 二〇〇三
- 11・11 ロマン・ロランの後継者たち
 蜷川 譲
- 4・20 ロマン・ロラン記念スプリングコンサート
 ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ
 ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ
- 7・16 ロマン・ロラン記念サマーコンサート
 演奏…ピエール・イワノヴィッチ
 郁子・イワノヴィッチ
- 5・29 “きょう”を読む『京都、半鐘山の鐘よ 鳴れ!』
 朗読とおはなしの会
 おはなし 尾埜 善司 朗読 村田まち子
- 6・12 ロマン・ロラン没後六十年記念コンサート
 梅原ひまり 神谷郁代デュオ
 ヴァイオリン演奏…梅原ひまり
 ピアノ演奏…神谷 郁代
- 6・25 生々発展する魂
 ゲーテとベートーヴェンそしてロマン・ロラン
 青木やよひ
- 9・11 抗日中国における中仏文化交流
 中国の知識人はロマン・ロランをどのように評
 価したか
 内田 知行
- 1・29 現代の法とヒューマニズム
 加古祐二郎と瀧川事件
 園部 逸夫

- 10・29 交差する肖像
 ロマン・ロランとクロードル
 J・F・アンス
 通訳 原口 研治
 10・13 中国研究を通しての日仏交流
 京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合
 狩野 直禎
- 二〇〇六 戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン
 山口 俊章
 二〇〇八
 11・6 『ピエールとリュース』を演出して
 今藤政太郎
- 二〇〇七 日本におけるロマン・ロラン受容史
 シッシュ・デイディエ
 通訳 シッシュ由紀子
 3・8 朗読の会
 親子で読む・聴く『ジャン・クリストフ物語』
 会員たち
- 1・20 琴 笙 ヴァイオリンによる新春コンサート
 大谷 祥子
 9・16 「前理事長尾埜先生への感謝の会・記念講演」
 ロマン・ロランと日本人たち 尾埜 善司
 榎本 泰子
- 2・3 歌と朗読の会
 豊 剛秋・増永雄記
 10・4 ロマン・ロラン国際平和シンポジウム
 宮本正清の詩『焼き殺されたいとしららへ』
 「わらい」朗読 尾埜 善司
- 7・21 朗読の会
 第一次世界大戦とロマン・ロラン
 尾埜 善司 ほか 会員
 10・4 ロマン・ロランが愛したベートーヴェン
 フランソワ・ラベット
 ピアノ演奏…神谷 郁代

二〇〇九

朗読の会とピアノ演奏『ジャン・クリストフ物語』

ピアノ演奏…岩坂富美子

朗読…下郡 由ほか

「日本・ロマン・ロランの友の会」六十周年記念

6・13 レクチャー・ギター コンサート 西垣正信

9・30 フー・ツォン ピアノリサイタル フー・ツォン

10・24 犠牲の宗教への問い 高橋 哲哉

二〇一〇

7・24 小林多喜二とロマン・ロラン―反戦・国際主義

の文学を求めて― エヴリン・オドリ

9・29―10・3

一九五三年のフランスの子供の絵特別出品(京

都市幼児・児童・生徒作品展及び姉妹都市交歓

作品展)

ピアノリサイタル 神谷郁代

二〇一一

2・19 朗読の会 トルストイ没後一〇〇年記念『トル

ストイの生涯』『伯爵様』

会員たち

読書会報告

例会、ロマン・ロラン研究所で原則第四土曜日午後二時―四時。

二〇一〇年、四月二十四日、五月二十九日、六月二十六日、七月十日、九月二十五日、十月二十三日、十一月二十七日、二〇一一年一月二十九日、三月五日、以上九回。二八四回―二九三回、友の会から数えると四六七回終了。テキストは『マルヴィーダの手紙』『内面の旅路』『リリュリ』『トルストイの生涯』そして七月は『ベーターヴェン研究』、訳者の佐々木斐夫先生追悼として参加者が朗読。

通年、参加総数一二二人。

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六—一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないであります。

しかし、ロマン・ロランの眞の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、眞に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頹廢から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研

究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

公開講座

●講演会

●読書会・研究会

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

●ロマン・ロランの著作に感動、また

●彼の周辺の芸術家たちに興味、

●あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感

いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。

●特典①機関誌「ユニテ」の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。

●会員①一般賛助会員は年会費一口五千元から。特別賛助会員は年会費十口以上。

二〇一〇年度 賛助会員、寄付者名簿

(アルファベット順・敬称略) *特別会員と同等の寄付者

- | | | | | | | |
|------------------|-------|-------|--------|----------|--------|--------|
| 安部 道子 | 安藤 知子 | 有馬通志子 | 奥村 一彦 | 大西 泰子 | *尾埜 善司 | 折田 忠温 |
| シュシュ・D・由紀子 | 権 英子 | 五島 清子 | 大谷佳世子 | 大谷 史朗 | 大谷 祥子 | 坂谷 千歳 |
| 萩原 葉 | 長谷川和宏 | 長谷川治清 | 佐久間啓子 | 清水 憲一 | 三友 居 | *佐々木昌義 |
| 早川工務店(早川 友一) | 林 次郎 | 日野三三代 | *佐々木雅子 | 志賀 鍊三 | 下郡 将宏 | 下郡 由 |
| *本郷美智子 | 福田 幸子 | 古家 和雄 | 園部 逸夫 | 鈴木 文代 | 所司 育代 | 多田 淳子 |
| 井原 眞弓 | 井原 義明 | 池垣 勇 | 田間 千晶 | 谷口 景子 | 谷口 良則 | 田代 輝子 |
| *稲畑産業株式会社(稲畑 勝雄) | 石川 梢一 | | 田谷 里美 | 徳永 勲保 | 徳野真知子 | 長 美穂 |
| 井土 真杉 | 岩坪嘉能子 | 神谷 郁代 | 上原 栄子 | 上原 徳治 | 植松 晃一 | 上西 妙子 |
| 加藤 澄子 | 加藤富美子 | 加藤 陽子 | 馬木 紘子 | 梅田 菊代 | 梅原 ふさ | 氏家 玲子 |
| 小張 芳男 | 木下 洋美 | 清原 章夫 | 和田 義之 | ラストベリ・稔子 | | 八木美佐子 |
| 馬淵 岳大 | 峯村 泰光 | 松浦さつ子 | 安木由美子 | 薬師神徳治郎 | | 山口 俊章 |
| 宮内 幸子 | 茂原 公子 | 森本 達雄 | 山本 和枝 | 山岸 哲男 | 山下 雅子 | 柳父 閑近 |
| *森内依理子 | 村上 光彦 | 村松 敏 | 柳田 基 | | | |
| 村山香代子 | 永易 秀夫 | 永田 和子 | | | | |
| 中村 信子 | 中西 明朗 | 中田 裕子 | | | | |
| 西村七兵衛 | 西成 勝好 | 西尾 順子 | | | | |
| 乗金 瑞穂 | 能田由紀子 | 小尾 俊人 | | | | |
| 岡部 素行 | 岡村千江子 | 大川起示子 | | | | |
| | | 岡山 善政 | | | | |

『ユニテ』編集を終えて

今日は三月十五日です。四日前、「東北関東大震災」が起こりました。地震・津波・火事・原子炉の溶融異常などの複合した、かつて無かった、私たちの初めて経験した災害です。災害の現地の方々、また私たちの友人の会員の方々、皆さまの御安泰を祈るばかりです。

研究者のお話では、マグニチュード九の大きさの地震は、古い日本の文献によれば一千年以前の存在が記録され、また、三陸地方の津浪の土壌が地層の分析から証明されていた、とのことでもあります。周期の幅が大きいことから、防災の行政措置（理性の適用）が及ばなかったことはまことに残念であります。人類は理性の能力すなわち、認識力、判断力、想像力などを、畏敬すべき超越的な存在によって与えられておりますので、われわれは未来のために、今回の出来事をつよく記憶に止めるべきであります。

*

ロマン・ロランは、その晩年に、神父たちからカトリッ

クへの改宗を望まれました。それは本誌連載の「最後の扉の敷居で」で、みなさまのよく御存じの通りです。ロランは「理性」のために、宗教帰依をついに承認しました。哲学者ベルクソンもまた、臨床の神父にたいし、その希望はこたえられない、理性的には、信仰は受けられない、といったといっています。

ゲーテの詩に

「学問と芸術を有する人は、

宗教をも持っている。

この二つを有しないものは

宗教を持つがよい」

（「ゲーテ全集」ハンブルク版三六七頁）

とあります。

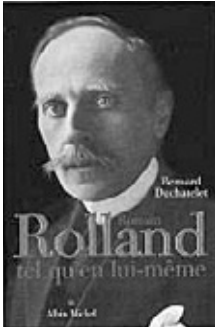
ロランは、われわれが理性で知りうるものの1/10をも、すでに知っているといえるのだろうか、広大な、未知の世界が存在する、われわれは「理性」を棄てることはできないのだ、という趣旨のことをのべています。ロランはいぜんとして、私たちの師であります。

本号は前理事長尾埜善司様、常務理事佐々木昌義様の

追悼のことは加えました。お二人の長年にわたる御努力により、研究所の現在は、在ることを思い、あらためて心からの冥福をお祈りいたします。

なお表紙の写真は尾埜先生の撮影されたものでございます。
(小尾俊人記)

デュシャトレ先生の「ロマン・ロラン評伝」(写真)が村上光彦先生によって今年九月、みすず書房で翻訳出版されます。ご期待下さい。



この度の東日本大震災でお亡くなりになられた方々、ご家族、ご友人に深い哀悼を表します。被災された方々に心からお見舞い申し上げます。一日も早く元の生活を取り戻せますようにお祈りいたしております。わたしたちはあなたの方のことを忘れません。

編集部

小尾 俊人
野村 庄吾
西村七兵衛
中西 明朗
宮本エイ子
表紙装丁
小尾 俊人

ユニテ 第三十八号

発行日 二〇一一年四月二十二日

発行者 (財) ロマン・ロラン研究所

理事長 西成勝好

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話・FAX

(〇七五) 七七一―三二八一

郵便番号 六〇六一八四〇七

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九―五九九九六

印刷所 (株) 北斗プリント社

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>

E-mail rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp

U N I T É

Sommaire

Romain Rolland et Takiji Kobayashi	Evelyne Audoly
Au seuil de la dernière porte : réflexions (suite)	Mitsuhiko Murakami
À la mémoire de Zenji Ono	Yoshitomo Imaé
À la mémoire de Masayoshi Sasaki	Toshito Obi
Lecture du Périple	Takehiro Mabuchi
La découverte du monde intellectuel à travers Romain Rolland	Daizo Kuroyanagi
Le grand séisme du Japon de l'est et L'Âme enchantée	Eiko Miyamoto
Compte rendu des activités de l'Institut Romain Rolland	
Activités et objectifs de l'Institut Romain Rolland	
Annuaire 2010 des membres et donateurs	
Postface	Toshito Obi